

## 2. 5 図書館業務の多様化に対応した業務の見直し

東京工業大学附属図書館事務部長

笹川郁夫

はじめに

インターネット社会が世界規模で進行しつつある急激な情報化は、大学における研究資料や図書資料のデジタルライブラリ化を可能とし、知の蓄積機能を強化・推進して行く方向にある。

大学図書館においても膨大な量の情報の中から最新の学術情報を迅速かつ遅滞なく入手し、ユーザ主体のアクセス環境を整備するとともに様々な学術情報コンテンツを発信するポータル機能の企画・運用を図るなど、情報基盤体制を再整備することが求められている。

一方、新しい「国立大学法人」像について基本的な考え方が示され、大学改革の推進が焦眉の課題とされ、大学図書館においても利用者の立場に立ったサービスの展開を推進するために、民間経営学の導入を図るなど業務を弾力的・効果的に行う必要がある。今後は、新たな目標と計画を立て、目標・計画に沿った業務の見直しを図りつつ教育・研究・学習の支援体制を整備して行く事が喫緊の課題である。

### I. IT (情報通信技術) 戦略の動向

e-Japan重点計画 (平成13年3月IT戦略本部)

関連省庁の動向

(文部科学省)

○基本方針

- (1) 世界最高水準の高度情報通信ネットワークの形成。
- (2) 教育及び学習の振興並びに人材の育成
- (3) 電子商取引の促進、行政の情報化、公共分野におけるITの活用
- (4) ネットワークの安全性・信頼性の確保

○情報基盤の整備

- (1) スーパーSINETの構築とそれに対応する大学LANの構築
- (2) 学術研究用コンテンツの充実

○大学図書館における電子図書館的機能充実

- (1) 電子的情報資料の作成・提供機能を強化する。
  - ・ 各大学図書館が所蔵する図書・雑誌の目録DBの作成・提供
  - ・ 電子的情報の収集・提供システムの構築 (所蔵資料の電子化等)
  - ・ 海外学術雑誌の電子版 (電子ジャーナル) の導入

- ・ 情報処理関係施設等との連携を図り、各大学が作成した特色のあるDBを提供

(2) ネットワークを介した情報資源へのアクセスを可能とする機能を整備・充実する。

- ・ 情報処理関係施設等との連携を図り、ポータル機能の企画・運用を整備

□ IT市場の動き

- ・ ICカード化
- ・ マイクロバーコード
- ・ 第三世代携帯電話 (FOMA) → iモードOPAC
- ・ 携帯情報端末 (PDA) 市場

II. 大学図書館を取り巻く新たな情報環境

(1) NACISIS-CAT ⇒ 多言語対応

- ・ 中国語、韓国語・朝鮮語資料DB
- ・ アラビア語の検討開始

(2) NACISIS-ILLの海外展開

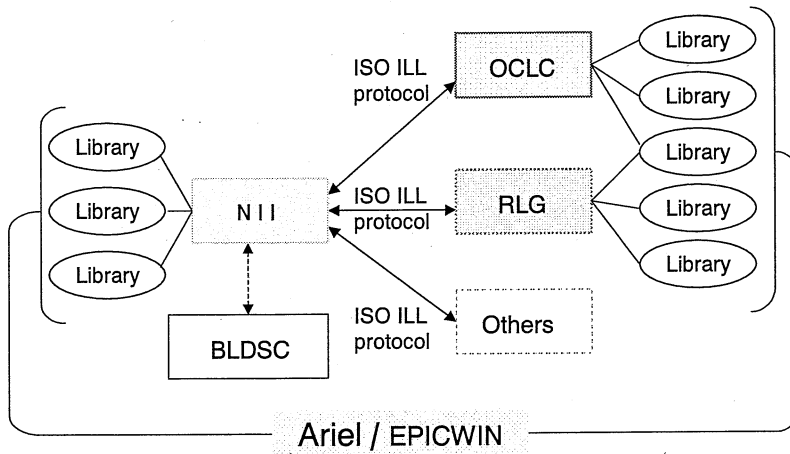
～Global ILL Framework を目指して～

米国 ARL との Meeting

米国 ARL GIF Project 4月15日から運用開始、5月28日現在17館が参加。

# Global ILL Framework

## ISO ILL Protocol Linkage between NACSIS-ILL & Other ILL System



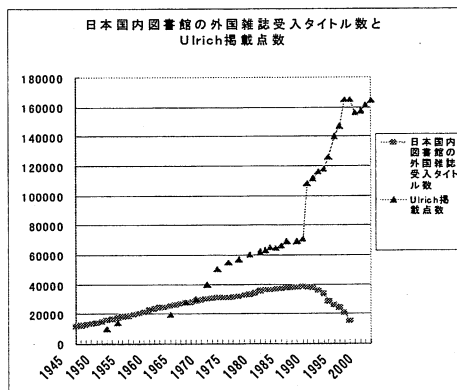
・国立大学図書館協議会「国際学術コミュニケーション特別委員会G I Fプロジェクト」の動き

### (3) オンラインジャーナル編集・出版システム

・学内紀要及び研究報告書などのオンライン化とコスト削減

### (4) 電子ジャーナル

## 外国雑誌国内所蔵タイトルの急減



1988年 38477誌

1996年 21034誌

1997年 15525誌

実は、国内雑誌を含めても激減

1988年 69310誌

1996年 40805誌

1997年 28412誌

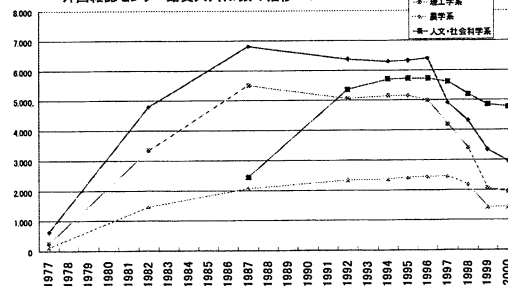
(学術雑誌総合目録による、国立情報学研究所宮澤彰教授調べ)

### 雑誌価格の高騰 (70年代→90年代)

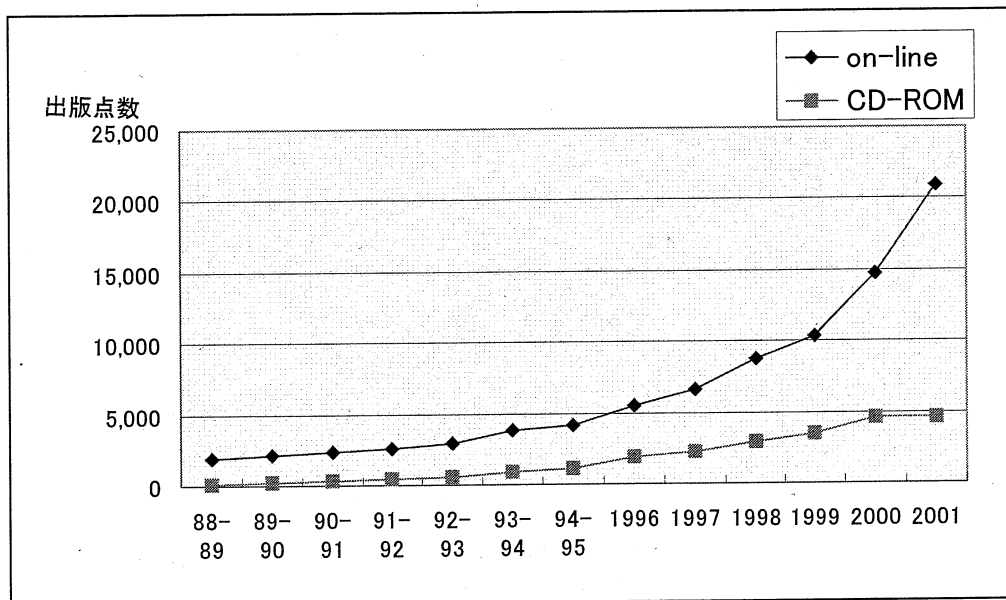
- ・タイトルあたりの価格 (インフレ率を調整して、)
- 商業出版社 7.3倍
- 学術団体 2.6倍
- 非営利教育出版社 8.9倍
- 学術団体 8.2倍
- 非営利教育出版社 5.4倍
- ・しかし、利用は増えている
- 論文あたりの利用回数
- 1977 400ないし1800 (平均638)
- 1990年代 平均900
- 科学者一人当り利用論文 100 → 122
- 論文を読む時間 (年) 80h → 110h

### 外国雑誌センター館でも急減

外国雑誌センター館受入タイトル数の推移 1977-2000



## 電子ジャーナル出版点数の推移



- ・外国雑誌の価格高騰 → 米国内でも207%のUP
- ・ SPARC → 50大学余りが出資、SPARC ヨーロッパも設立、  
Japan SPARC 参加要請 → インパクトファクターの高い雑誌を目指し、出版支援を  
ARL で開始。 → BioOne
- ・ 出版社毎、直接の交渉 → 国立大学図書館協議会「電子ジャーナルタスクフォース」
- ・ デジタルアーカイブ → 国立情報学研究所で運用
- ・ 学内ニーズとサービス方策 → アクセス環境

### (5) 大学発のポータル機能充実・強化

- 大学等からの情報発信の取り組み →
- ・ 電子図書館的機能の整備
  - ・ 大学等のホームページ
  - ・ 研究者個人による

### (6) OPACと各種DBとのリンク

- ・ 電子ジャーナル購読との連携
- ・ シラバスDBに書誌情報を付加した発信
- ・ ブックコンテンツDB etc...

## Ⅲ. IT環境下における新たな図書館業務体制

### (1) 組織体制と事業体制

旧体制 ⇒ 新体制

(コンセプト)

- スタッフと上司が、立場に関係なく、築いて行く体制
- 若い人から直接上司に伝わる仕組
- 自分には関係の無いという事がない体制
- 係（掛）の垣根を越えた業務体制（プロジェクト体制）
- 徹底したC o s t分析の必要性
- 民間経営学の導入
- アイディアの創出（利用する人のための発想）

- ・インフォーマルなネットワーク作り ⇒ オフサイドミーティング
- ・環境が変わってきた中で、自分がどれだけの事が出来るか！考える事が必要

(2) 事業計画

- ・目標と課題の設定 = C o m m i t m e n t（目標が明確）

(3) 業務見直しのための方策 ～通常業務の見直しとシステム化による省力化の向上～

- ・ 専門的知識を必要としない業務の外注化
- ・ 情報化による効率化の推進
- ・ 従来 of 定常業務の徹底見直し
- ・ 選書／発注から目録業務までの自動サイクル化＝システム化
- ・ サービスカウンター業務の外注化
- ・ レファレンスDBの活用

\*与えられた課題を処理するのではなく、現場から課題を見つけ出し、読み取る。

(4) 目標に沿った業務計画立案のための方策

※ いずれも、係としての事業あるいは館としての事業、学内全体に関わる事業の企画書及び提案書の作成が最も重要。

[ポイント]

- ①計画書作成（背景、課題（現状）、目的・必要性（提案）、効果、予算）＋ポンチ絵、統計（折線グラフ等）
- ②「出来ないとしたら、出来るようにするためには、どうしたら良いか！ 知恵を出す」
- ③何のためにこの課題があるのか！ 必要なのか！を考える。
- ④制約条件を変えたり、裏読みしたりして行く能力も必要！
- ⑤これまでは、こんな体制あるいはこんな形

→ 今後は、こんな体制あるいはこんな形 → こんな効果が！

#### IV. 図書館業務の専門性と学内外情報システムとの連携

- ・ インフォメーションバリアフリー化
- ～エンドユーザ主体の図書館アクセスを目指す～